

平成二十年度「花のまわりみち」

木村 里風子 選

俳句入選句

特選

(三句)

「特選一席」

帯解けばこぼるる花の二三三つ

竹本 君代

(評) 久女の句に、花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ、があります。この句とこからか花びらが二三片落ちたという。花疲れの帯をとく、花びらが落ちることによって、さっきまで見ていた花が思い出されたことでしょう。

「特選二席」

きれいだな心のシャッター大忙し

高瀬 真梨(まり)

(評) この句には季語がないのですが、子供の発想の新しさに感心しました。心のシャッターとは、言い得て妙。美しさを新鮮な感動として表現したのは純心さにほかならないのです。

「特選三席」

主治医より許可を貰って花の旅

中植 勝己

(評) よほど見たい桜だったのでしよう。主治医の許可が出たときの嬉しさがわかります。単純明快なだけに想像がひろがります。

雪洞に灯の入りしより夕桜

米花 育三(牛歩)

(評) 昼と夜の区切りは、薄暮、薄明りの残る夕ぐれどきを捉えた句。雪洞が灯ったから、今からが夕であり、花は夕桜となった。灯の入りしよりがよいのです。

花冷を誘ふ雨となりにけり

山岡 祥子

(評) 花の雨、言葉は詩情がありますが、やがては冷えを誘うことでしょう。降り出した雨に作者は非情を感じられた。

所在なき昼のぼんぼり花疲れ

松原 英明

(評) 灯の入っていない雪洞ほど目障りであり、用を足さないのは、まったく所在なさを感じます。見ているだけで情けないと思った作者。夜の雪洞は風情があり、灯の入っていない雪洞に逆に花疲れを感じたのでしょうか。

母の背で花に触れぬる障害児

北村 弘明

(評) 身体の不自由な子が母に負われて花を見ている姿に作者は感動した。花は誰が見ても美しいのですが、特に身体の不自由な子には美しく見えたに違いないのです。

花に停め花に停めゆく車椅子

住田 祐嗣

(評) まわりみちの花の一本毎に停めて眺める。来年の花を見ることが出来るのでしようか、今年の花をしっかりと見ておくという車椅子に乗っている人と押す人の感慨があります。

佳作

(二十五句)

花の径一期一会の顔集ふ

島田 力雄

大輪の花匂ひ合ふ親子かな

斎藤 金二

内緒にて来れば雨なり花のみち

岡村 みきえ

花疲れ駅のベンチのふさがつて

上田 美知子

天と地の中に息づく花あかり

原本 芳子

紅手鞠弾めるごとく枝垂れけり

西村 文枝

逢うてすぐ別れる花の夕べかな

鳥内 真里子

巡り来て久女の花に逢ひにけり

滝山 紅

見上ぐ顔等しく照らす花万朶

神波 瑞江

蔭までも桜色なり花の道

下村 知恵子

きのふより今日の明るき花万朶

堀 淑子

花万朶透かして空の青さかな

吉岡 昌文(雅文)

琴の音や肩ふれ合ふも花の園

藤井 佐和子

八重桜少しおくれて歩く癖

安達 基

蒼天に満開の花競ひ合ふ

山田 浩子

花影を踏みつつ車椅子押しぬ

山田 巴子（ともこ）

病む夫に寄り添って見る八重桜

中植 紀子

花の径投句短冊詠む男

若宮 直美

琴の音や句帳片手に花の下

谷口 敬誠

嫁ぐ子の後すがたや花吹雪

灘尾 なおき

花のみち昔の唱歌流れ来る

長 直邁（有情）

投句所へ吹き込んで来る花の屑

野津 訓子

カメラには写せぬ花のにおいかな

早田 信康

さくらの木花がいつばいおもそうだ

ささ木 まお

母につきむりやり歩いたでもきれい

山根 莉子

選者吟

木村 里風子

鍛造の音なき夜の桜かな